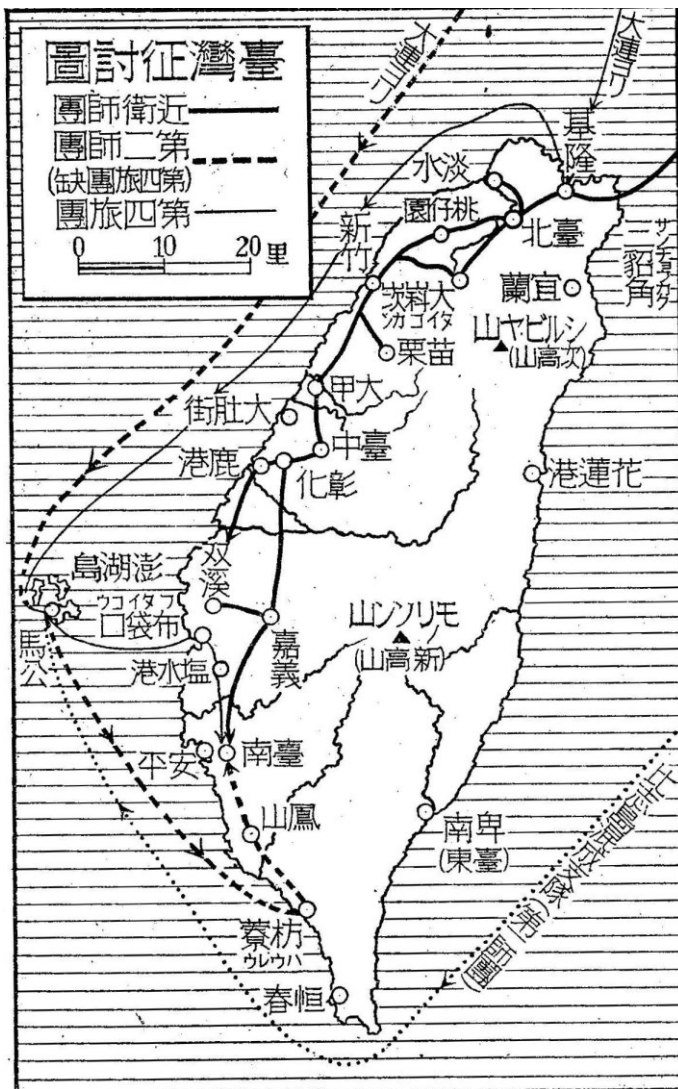


第12話 台湾の征討

新たに我が領土となった台湾で、清の守将らが土民を煽動して反抗する。
 北白川宮能久親王が兵を率いてこれを討たれ、ついに風土病に罹って薨じられる。
 やがて全島が平定する。

台湾の経営

三国の干渉によって止むなく、遼東半島は清国に還付したが、台湾と澎湖島とは新たに我が領土になったので、5月10日、海軍大将樺山資紀を台湾総督に任じて、これを統治させることにした。それで、樺山総督は、5月24日に宇品を發し、27日に琉球沖繩島の中城湾で、遼東半島の金州から近衛師団を率いて見えた同師団長陸軍中将北白川宮能久親王と一緒に、それより相共に進んで、5月30日に台湾の東端三貂角に上陸した。



清国将士の反抗

ところが、はじめ、日清間に戦争の起こった頃から、台湾の守備に当たっていた清国の将士らは、今度、下関条約で日本にこれが割譲されることになったのを知って大いに憤り、断じて日本などにこれを渡すものかと、新たに台湾全島をもって独立の共和国とすることを定め、5月25日、旧台湾巡撫唐景崧を推して大統領とし、広東南鎮総兵劉永福を軍務総統とし、その国旗をも、清国の黄龍旗に対して別に黄虎旗として、飽くまでも日本に反抗する態度を取っていた。

従って、島内は頗る不穏であったために、わざわざ台湾譲渡に関する全権委員として上海から渡って来た清国の李経方も、危険で、うっかり上陸が出来ず、ついに止むなく、6月2日、彼は三貂角沖に停泊する我が横浜丸の船中で樺山総督と会見して、ここで極めて形式的な台湾および澎湖島授受

の式を行い、倉皇として帰国してしまったので、すなわち台湾譲渡の実際はこれより、我れが清の将士らを征討しなければならないことになったのです。

第12話 台湾の征討

このえしだん ぞくへいそうとう 近衛師団の賊兵掃討

それで、近衛師団は3日に進んで基隆の賊共を追い、7日に台北城を陥れ、8日に淡水港を占領した。師団長宮は10日に基隆を出発、11日に台北に入城されたが、樺山総督もまた14日には台北に入り、17日からは総督府が開かれた。とはいえ、賊はなお南方に逃げて飽くまでもと抵抗を続けたので、近衛師団は更に進んで6月22日に新竹を取り、8月4日に苗栗を抜き、その26日に台中を奪い、28日には八卦山の砲台を攻めて、三貂角上陸以来はじめての激戦を交え、ついにこれを陥れて彰化を占領した。師団長宮は、その日、彰化に着かれた。

たいわん えんねつ ふうどびょう 台湾の炎熱と風土病

こうして台湾の北部は8月の末までに殆ど平定したが、上陸以来、焼くような炎熱と風土の病のために、賊共の抵抗などよりも遥かに多く悩まされつづけて来ていた近衛師団は、この頃になると、ますます流行病にかかる者が多く、健康な者といつては、僅かに全体の約1/5位しか残っていなかったのに、しかも賊の総大将劉永福は、20,000と号する大兵を以って台南に拠り、その勢いが頗る盛んでした。

なんしんぐん へんせい 難進軍の編成

そこで大本营では、当時、遼東半島の金州に駐屯していた第二師団を近衛師団に加えて新たに南進軍を編成して、陸軍中将高島鞞之助を台湾副総督に任じて、南進軍の司令官を兼ねさせ、台南を海陸から攻撃させることとした。第二師団長陸軍中将乃木希典は、すなわち7月8日、師団を率いて金州を出発し、大連から船に乗って、先づ澎湖島の馬公に向った。

たいなん さんぼうこうげき 台南の三方攻撃

こうして10月10日、高島司令官の命の下に、伏見宮貞愛親王は、一個旅団を率いて澎湖島から布袋嘴に向かい、乃木中将もまた一個旅団を率いて枋寮に向ったが、両旅団とも11日に全部上陸すると、一方、その後ますます南下して、10月9日に嘉義を占領していた近衛師団と共に、三方から並び進んで台南



台湾 西南端 枋寮

を攻撃することにした。即ち近衛師団は南下し、乃木旅団は北上し、伏見旅団は脇から斜めに台南に迫る事としたのです。

さて、三方から要地を略取しながら、我が軍が次第に台南に進んで行くと、やがて袋の中の鼠となろうとしていた劉永福は、我が陣容のさかんなのを見て忽ち恐れをなし、もはやいかにしても敵し難いことを悟るや否や、逸早く例の清将得意の遁走を企て、10月20日、ひそかに雇い入れた英船の石炭庫に身を潜めて、安平から廈門に逃げた。

第12話 台湾の征討

台南の鎮定

それで、翌21日、先づ乃木旅団が台南に進んだ時には、もはや城内には一人の賊兵もいなかった。その翌22日、他の諸軍も相ついで入城して、互いにその鎮定を祝した。ところが、この時にはすでに我が軍にとって、全く別な一大心配事が起こっていた。外でもない、近衛師団長北白河宮能久親王が風土の病に罹られ、重態に陥られていた事です。

能久親王の薨去

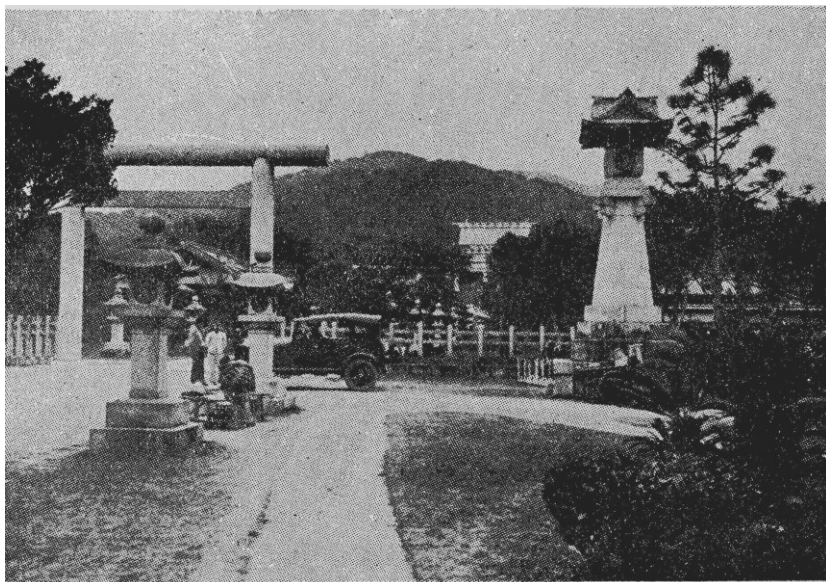
これより先き、宮は5月30日に三貂角に上陸以来、金杖玉葉の身をもって、甘藷島の中にテントを張ったばかりの宿営で、蒸し焼きの甘藷を手づから皮を剥いて召し上がったり、或いは馬さえも通わぬような険阻な路を、脚絆草鞋に身を固めて、徒歩で進みになられたり、或いは不潔な土民の土間に戸板を敷かせたばかりの宿舎で、異様な湿気や雨漏りや蚊などのために安眠もされなかつたりしながら、所謂瘴焰蚕雨の中を日に日に加わる炎熱を冒して南方に進軍になっていた。

やがて8月の末に台湾の北部は鎮定になり、10月9日、嘉義をも占領して、いよいよその18日に台南合撃のために嘉義を出発になろうとしていた時、17日の夜からの俄かの発熱で、瘧（訳注：マラリア）にかかれた事が分かったのです。それで、軍医部長をはじめ只管ご静養をと申し上げたが、宮はお聴きいれなく、病を冒して出発になり、駕籠に乗って尚も軍の指図をされた。22日、台南に着かれた時には、すでに容易ならぬ容態で、ついにその28日に御年49才で薨じられた。遠い昔の日本武尊の故事を今日の前に見て、国中の者は皆その功績を仰ぐと共に、深くお歎きしました。

宮が北部を鎮定になって、将に南部に向おうとされた時の御詠に、

台北融々仁政成
皇軍到处湧—歓声—
旭光将レ被台南地
殲—彼渠魁—安—万生—

という詩がある。この颯爽とした盛んなご意気を伺うにつけても、凱旋間近の薨去は、まことに遺憾至極な思いをせずにはられません。



台北

台湾神社

後、宮の英霊は、台北に建てられた官幣大社台湾神社に祀られて、永く同島をお護りになっている

(訳注：現在は、跡地に圓山大飯店が建つ)。

台湾全島の鎮定

さて、台南の占領で、台湾全島はほとんど平定し、ただ最南部の恒春地方だけがなお聊か不穏でしたが、これも乃木旅団の一部の出征で、11月1日には全く鎮定した。そこで11月6日、南進軍の組

第 12 話 台湾の征討

織^{しき}を解^とき、近衛師団^{がいせん}は東京に凱旋^{とど}し、第二師団^{しゅび}はなおしばらく留^{とど}まって台湾の守備^{しゅび}に当たった。

なお、この役^{えき}における我が軍の戦死者^{せんししや}は僅^{わづ}かに 164 人、負傷者^{ふしょうしや}は 515 人にしか過ぎなかったが、病^{びやう}気^{いん}のために死^しんだ者は実^{じつ}に 4,478 人、その治^{ちりやう}療^{りやう}のために、内地^{ないち}に送^{そう}還^{かん}された者は 21,000 余人、台湾^{びやういん}の病^{びやう}院^{いん}に留^{とど}まった者は 5,000 余人の多^{おほ}きに上^あった。これを見^みても、いかに我が軍^いがこの地^ちの風土^{ふうど}病^{びやう}のために悩^{なや}まされたか^しが知^しられます。

(第 12 話 台湾の征討 終わり。 次は前頁に戻り、第 13 話 北清事変と日英同盟)